日差しは日増しに和らぎ、春の訪れを感じる季節となりました。

本日は、新型コロナウイルス感染症やインフルエンザの収束が待たれる中、様々なご高配を賜り、私達 98 名の門出に対してこのような式典を挙行して頂き、誠にありがとうございます。また、ご来賓の皆様、長鶴学長、諸先生方にご臨席を賜り、卒業生一同、心より感謝申し上げます。

振り返れば、本日に至るまでの四年間の学生生活は、試行錯誤を重ねながら感染症との共生を図りつつ、自分自身と向き合い、何事にもめげずに全力で取り組み続けた、とても有意義な日々だったように思い返されます。

一年次、当初から新型コロナウイルス感染症により仲間達と直接顔を合わせる機会もなく、これからの学生生活への不安は募るばかりでした。そのような中、ナイチンゲールの「看護とは生命力の消耗を最小にするように生活過程を整えること」という言葉を軸に、人間や病むということについて、「看護覚え書」から学修し始めました。宇宙の誕生から生命について捉えることや科学的視点で看護を捉えていくことは非常に難解で、人間や看護の奥深さの一端に触れたような感覚になったことを覚えています。

二年次、専門的な科目や専門性・実践力を高める学修が始まりました。技術演習ではグループメンバーで練習し合いながら、相互に技術を高め合ったことが思い返されます。また、初めての臨地実習が学内実習になってしまいましたが、先生方のご尽力によって充実した実習を送ることができたことも思い返されます。

三年次、一人の患者様を受け持ち、これまでに培ってきた知識や技術を駆使して看護を提供していく、半年間の臨地実習が始まりました。教職員の皆様や病院・施設関係者の皆様のご尽力により、学生が最大限実習しやすい環境を準備して頂けたことで、感染対策を万全にして実習に臨むことができました。一部、臨地での実習がかなわないこともありましたが、受け持たせて頂いた患者様と真摯に向き合い、目の前の患者様にとって最優先で必要なことは何なのか、自分はどんな手段を用いて手を差し伸べることができるのか必死に考え、看護計画の立案や実践につなげ、実施後の患者様の変化に一喜一憂することもありました。実習終了後のグループメンバーとのディスカッションや先生方からの助言により、多角的な視点から看護展開ができ、自身の臨床看護実践能力を高めるとともに、看護観を確立していく、とても貴重な経験となりました。

そして四年次、これまでに学んだチームにおける看護師の役割を自らの力で実践していくための臨地実習が始まりました。カンファレンスや会話を通して情報の更新や共有を行い、周囲の状況を把握しながら、チーム間で相互に補い合うことの必要性を実感することができました。私は精神科で実習をさせて頂く中で、大声を抑制するための内服により ADL が低下し、発語や笑顔など本人らしさが失われてしまった患者様のカンファレンスに参加しました。私もカンファレンスが開かれる前からこの患者様とよく関わるようにし、よい変化をもたらせるように毎日会話を試みていました。自分にできることはないかと考えながら参加したカンファレンスにおいて、看護師長の「無駄な内服を減らし、本人の持てる力を

活用して回復させることを最優先に考えよう」という言葉がとても印象に残りました。この方の持てる力として、指相撲に興味を示すことが挙げられたため、その後の関わりとして指相撲や手のマッサージなどのタッチングも交えながら会話を続けていきました。すると実習最終日に近づくにつれ、私と目を合わせながら、私に呼びかけるような発語をするなどの変化が生じ、その変化がとても嬉しかったことを覚えています。このことから、内服だけに頼るのではなく、本人の持てる力を見出すことで、その人らしさを尊重するように関わることの大切さを実感し、その言葉が私の看護観の軸になっています。

実習、就職活動、卒業研究、国家試験、と心身ともに体力が削られる中、仲間達と励まし合い、先生方や家族の支えがあったからこそ厳しい一年間を乗り切ることができ、私達は本日の卒業式を迎えることができました。

そして、私達はこれからそれぞれの新たなスタートラインに立つことになります。私達の行く先には辛いこと、苦しいこともあることでしょう。しかし、私達は四年間の学生生活の中で、自分自身との向き合い方や他者との関わりが生み出す温かさを改めて知ることができました。この経験は、看護職者として患者様や患者家族と向き合う際に、心と体の両面に目を向け、本人の持てる力を最大限引き出すのに有効であると考えます。そして、他者の心と体を癒すために自分自身が持つぬくもりを届けられる人になっていると信じています。これまでの学びは、柔軟で軸のしっかりした看護職者として、自分の糧になると確信しています。

また、今年の１月、能登半島地震により甚大な被害が生じ、多くの尊い命が犠牲になりました。亡くなられた方々のご冥福をお祈り致します。DMAT、DPAT 等で被災地に赴く方々の姿を見て、人々の支える力の大きさを知るとともに、現場の状況を鑑みながら、しっかりと連携をとることの重要性を改めて理解できました。私達の住む宮崎県も他人事ではないため、看護職者として発災時から臨機応変に対応できるよう常に準備し、万全の状態で看護が提供できるように自分自身も成長し続ける必要があると考えさせられました。どんな状況でも心と体に傷を負い、満足な生活が送れない方々に寄り添える看護職者になりたいと思います。

結びにあたり、今日まで熱心にご指導くださった諸先生方、より良い学びの環境を整えてくださいました職員の皆様、臨床実習を通して多くの学びをくださった患者様や指導者の皆様、そして、一番の応援者であり陰ながらあたたかく見守り、支えてくれた家族、ともに支え合った最高の仲間たち、全ての方々に深く感謝申し上げますとともに、本学の今後の益々のご発展と在学生の皆様のご活躍を心よりお祈りいたしまして答辞とさせていただきます。

令和６年　３月 18 日

第 24 回　卒業生代表　中山大生